

全校の皆さん、おはようございます。

朝晩の冷え込みがいつそう厳しくなりました。窓から見える木々の葉も落ち、アルプスの山々も雪化粧を始めました。青く澄み切った空に冬の匂いを感じますね。

さて、今朝は「覚悟」というお話をします。私たちの生活の中で、何か重大な事柄が起こったり、何かを始めたるとき、何かを決断するとき「覚悟」を決めるといいますよね。

覚悟は一般的に重大な決意や決心を意味します。しかしながら仏教でいう覚悟は、真理を悟ることを意味します。そして真理に目覚めた人を仏陀といい、その仏陀となる前の悟りを求める段階のことを菩薩といいます。

あるアメリカ人の大学教授が、日本の学生をみてこんなことをおっしゃっていました。「日本に来て不思議に思うことが多くあります。たとえば授業中、学生たちに「質問はありますか」と聞くと、皆いつせいに黙って、私と眼が合わないように下を向きます。アメリカの学生と違い、日本の学生はどうも授業で目立った振る舞いをすべきではないと無意識のうちに教え込まれているようです。」と。

この話、私たちにも当てはまるところはありませんか。特別意識しているわけではありませんが、私たちにはどこか目立つことを嫌う節がありますよね。

菩薩とは全ての人々を救おうとの願いを誓いとして表明し、仏陀への道を歩みながら全ての人々を導く状態です。それは、決して自分だけが悟ればよいとは考えず、全ての人々と悟りを目指し、共に歩み続ける心構えでもあるのです。

例えば授業中、質問することで注目されて恥ずかしいという思いもあるでしょう。しかし、思い切って質問すれば、自分の疑問がはれるだけでなく、クラス全員の知識や理解度も上がるのです。質問することによって、自分が学問的に成長するだけでなく、皆も共に成長する機会を作り出すことになるのです。そこには、すべての人と共に学び、共に歩み、共に成長することを目指す菩薩の姿と通ずるものがあります。

「聞くは一時の恥 聞かぬは末代の恥」という古歌のように、勇気をもって自分の分からないことを質問してみると、「覚悟」の意味が身をもって感じられるかもしれません。